

私たちの町の遺跡

二本木発掘物語

■第12話「誰の墓」

平安時代に国府（肥後国を治める役所）があった二本木遺跡からは、たくさんの墓が発見されます。当時は、生活の場である町のあちこちに墓がつくられていたのです。墓の他に火葬場もあったようで、遺体を火葬した後の、灰や炭、さらには葬式に用いた椀や皿と一緒に棄てて埋めた穴も発見されます。通常、遺体はそのまま土葬するのですが、火葬された人もいたのです。なぜでしょうか。

そのヒントを与えてくれる発見例があります。灰や炭とともに、関西でつくられた椀が出土した例です。椀は、素焼きの雑な器で、わざわざ関西から肥後に運搬する手間に見合うような商品価値の高いものではありません。おそらくは、京都から二本木の国府に赴任して来た役人が生活道具として持ってきたものと考えられます。そうした役人が肥後で亡くなって、葬式・火葬は現地で行ない、その時に使われた椀なのでしょう。火葬した骨は京都か、その周辺の故郷に持ち帰られた筈です。国府があった二本木は、肥後の政治・経済の中心地であり、様々な地域から人が集まり、暮らしていた場所です。そして死んでいった場所でもあるのです。

熊本市文化振興課 美濃口雅朗氏



← 関西で
つくられた
素焼きの
椀

↓ 墓に供えられた食器



枕草子で有名な
清原元輔も肥後
守に任せられ、
都から遠く離れ、
た熊本で八十
才で亡くなった
そうなの。

